

いえをうごかすちいさなものたち

住宅が変わり始めています。感染症対策によって在宅ワークが一般的になり、家族の団らんも働くことも住宅が同時に担うことが当たり前になりつつあります。感染症の広がりや、旧来の都市計画の、商業系地域に人を集め、住宅系地域は容積を抑えるという集中型のモデルを否定し、これからは、ある都市に人を集めるのではなく、その周囲に広がった住宅街が買い物や、外食をする場所にもなっていくのだと思います。

そのようなここ数年の住宅の役割の変化によって、同時にここ数十年で顕在化してきた住宅街の問題も解決していけたら良いと思っています。防災活動や、住民の高齢化、核家族化による独居、介護など、家族の変様による問題に、住宅街のコミュニティが果たせる役割は非常に大きいですが、それぞれの家が家だけでなく、オフィスになったり、お店になったり、カフェになったりする、そのような地域コミュニティに開かれた住宅をつくる時、これまでの住宅では対応できないところもあります。これまでの住宅は家族の団らんを主たる目的として作られており、プライバシーと、パブリックを両立することは容易ではありません。

ひとつめに考えられることは、今回のプロジェクトのように小屋をつくることだと思います。母屋とは別の小屋が、家族のための空間にもパブリックな空間にもなり、そのバランスを保ちます。

ふたつめとして、ご提案したいのは、より我々の身体に近い存在である、家具です。建築と比べてちいさな存在である家具は、可動性、可変性が高く、家と小屋、家とお隣さんのあいだを自由に流動できます。昔のお醤油のように、お近所さんで貸し借りすることもできます。ちいさな単位の家具が小屋に集まってマルシェが開かれ、またマルシェが終わったら別の小屋に移動する。ちいさな家具が集まってできる小屋は、流動性と継続性をもつ新しい住宅を示すものになると思います。